

令和4年度  
岡山高等学校 選抜1期 一般入学試験問題

国語 (45分 100点)

- ・合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- ・解答はすべて指示に従って解答欄に記入しなさい。
- ・問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答しなさい。

次の文章は、不動産会社で働く「星那」が、「浅羽さん」と会話をする場面です。「星那」は亡くなった祖母の茶道具整理をきっかけに、茶道教室に通い始めました。その教室の生徒である「浅羽さん」は、「澤山先生」の代わりに「星那」を指導してくれたことがあります。この日、二人は偶然出会い、「浅羽さん」がバレエ教室の先生をしていることが話題になりました。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

お稽古場では話をするのも緊張するが、外で会っているせいか、目の前の浅羽さんとは気楽におしゃべりができた。中学のとき、足の靭帯を痛めて以来、バレエはずっとやっていたいけれど、たまに自宅で、昔習った柔軟体操や、軽いバレエレッスンをして、気分転換していると話した。すると浅羽さんは「それは賛成だわ」と肯いた。

「お茶のお稽古でも、バレエの動きはけっこう役に立つからね。逆にお茶をやっていると、バレエの動きにも、メリハリが生まれるし。じつは茶道教室に通うバレリーナって、全国にけっこういるんだよね」

星那は目を丸くする。

たしかに今までのお稽古でも、何度かバレエを習っていた頃の記憶がよみがえっていた。お茶とバレエの共通点を感じているのは、自分だけではないようだ。よく考えれば、浅羽さんの姿勢のよさ、手先にまで神経の行き届いたお点前の動きは、バレエの延長線上にある。

浅羽さんは自転車にまたがって言う。

「顔を見られて、安心したわ。最近、教室で見かけなかったから」

意外な一言に、星那は胸がじんとなる。

この人の厳しい指導は、面倒見のよさの裏返しだったのかもしれない。

「年末から、ずっと仕事が忙しかったんです」

「そっか、初釜はどうするの？」

初釜とは、いわば新年の釜開きであり、一年でもっとも華やかな茶会らしい。すべての生徒が着物姿で集まって、先生の点てたお茶をいただく。しかし普段のお稽古をサボっている自分が行けば、真面目に通っている他の生徒にも迷惑をかけるだろう。だから初釜は、自主的に遠慮するつもりだった。そのことを伝えると、浅羽さんは残念そうに「そう」と呟き、「これから会社に戻る？」と訊ねた。

「いえ、帰宅するつもりです」

「じゃあ、ほんの少しだけ、うちの教室に寄って行ってよ」

星那は躊躇いつつも、肯いた。

浅羽さんのバレエ教室は、プロのバレエダンサーだったという母親によって創設され、その引退後は浅羽さんが代表として運営しているという。ちょうど昼のレッスンと、夜のレッスンの合間らしく、教室内は暗くがらんとしていた。

浅羽さんがパチンと照明を点けると、ワックスの塗られた床が反射した。壁は一面鏡張りになっていて、バーが設置されている。天井からはスピーカー

が吊られ、奥にはおそらく生徒用のロッカーが並んでいた。

星那は靴をぬいで、フロアに上がる。通っていたバレエ教室を思い出し、<sup>⑥</sup>無性になつかしくなった。浅羽さんは電気ストーブのスイッチを入れ、星那にストーブを手渡した。言われるままに、ストーブの前に膝を立てて座る。浅羽さんは荷物を脇に置いて、向かいに同じように座った。

「私もね、以前、お茶を休んでいた時期があったんだ」

浅羽さんは言い、星那は少し考えてから訊ねる。

「お仕事のせいですか」

「ううん、親の介護が原因。私は長女で、他の兄弟は離れて暮らしてるし、独身で、頼れる人もいなくてね。でも今から思えば、ああいうつらい時期こそ、お稽古の時間が必要だったんだろうな」

浅羽さんは三角座りをしながら、鏡にうつる自分を見ていた。

「澤山先生の教室で、私厳しくて、嫌になったでしょう」

「そんなことないです」

星那はあわてて首を左右にふる。

「いいよ、自覚してるから。つい言い方がきつくなっちゃうんだよね。自分のなかの理想の型があつて、それと違う動きを見ると、むずむずしちゃって。どうしてできないのって、感情的になっちゃう。だからこのバレエ教室でも怖がられてるんだ」

そう言って、浅羽さんは苦笑した。

「<sup>⑦</sup>私が通っていたバレエ教室にも、厳しい先生がいらつしやいました」

星那が言うと、浅羽さんはこちらを見て、「そうなんだ」と眉を上げた。

「教室には、三人先生がいたんです。三姉妹で、バレエをなさってて。長女と末っ子の先生はやさしかったけど、でも一番記憶に残ってるのは、厳しかった次女の先生。やる気がないなら早くやめた方がいいって、何度も言われました。でもそういう先生ほど、あとからありがたさが分かるものですね」

浅羽さんは<sup>⑧</sup>口角をゆるめ、教室を見渡した。

しばらく沈黙があつたあと、少し声を低くして話しはじめる。

「ずっと、プロのバレリーナを目指してたんだ。子どもの頃は、学校の行事や部活もそっちのけで、練習ばかりだったわ。当然、学校で友だちなんてできなくて、お弁当も一人で食べるのが当たり前でね。バレエ教室の子たちとは仲良かったけど、ライバル関係だから、普通の友だちとは違うでしょ？ プロになる夢は叶わないって、薄々気がついてからも、せめて周囲には負けないように、気を張って生きてきた」

そう言ったあと、浅羽さんはうつむいた。

彼女の気持ちを想像できるからこそ、星那はなにも言わなかった。

顔を上げると、星那に向かって彼女はこうつぶやく。

「でもお茶をするようになって、やっと自分の居場所を見つけられた。誰かと一緒にいなくても、一人ぼっちでも、心地のいい居場所はあるんだって、お

茶がはじめて教えてくれた。だから大変なときこそ、お稽古に行く意味があると思うんだよね。どんなに忙しくても、飛石を渡れば、そこには必ず、なにかが待っているから」

「なにか？」

そう、と浅羽さんは目を閉じた。

「心温まる一服、知的な仕掛け、何気ない会話。たとえば、雨の日には、屋根に水滴が落ちてくる音を聴いて、寒い日には、釜の湯気にぬくもりを見る。どんなに忙しくて、自分を見失いそうでも、稽古場にはいつだって変わらず、ゆつたりとした時間が流れている。飛石の向こうには、いろんなものが待っていると思わない？」

① 星那は、以前抱いた疑問の答えを、やっと理解した。なぜこの人が点てるお茶は、あんなに特別で、すんなりと喉を通るのか。なぜこの人のお点前は、ただ目を追うだけで、心を動かされるのか。彼女自身が、その尊さを知っているからだ。

すると教室の入り口のドアが、勢いよく開いた。

「こんにちは！」

口々に子どもの声がする。

幼稚園くらいの少女のグループで、こちらに気がつくと、不思議そうに見てくる。

「あなたたち、今は『こんばんは』でしょ」

浅羽さんは立ち上がり、明るく挨拶を返している。かつての星那と同じように、白いタイツをはいて、髪の毛をお団子にした少女たちを眺めながら、ここ最近の疲れがすっかり消えていることに気がついた。

今の自分があるのは、昔バレエを頑張っていたからだ。バレエでの挫折を乗り越えてきたからこそ、物件が売れなくても、多少理不尽な目に遭っても、めげずに前向きにやって来られた。こんな風に、自分を肯定できたのはいつぶりだろう。

「ありがとうございます」

鞆を持って、浅羽さんに挨拶をする。

「また、お稽古場だね」

「お願いします」

(出典 一色さゆり「飛石を渡れば」)

(注) バレーレッスン——骨盤の高さくらいのバー(横長の棒)につかまって、バレエの基本的な動きを練習すること。

お点前——お茶を点てること。

飛石——お茶室に続く通路に、とびとびに置かれた平たい石。

① —の部分**⑥**、**⑦**の漢字の読みを書きなさい。

② 「**④**星那は胸がじんとなる」**⑤**とありますが、このときの「星那」の心情を説明したものととして最も適当なのは、**ア**、**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア お稽古場では緊張を強いてくる浅羽さんとバレエを通じて親しくなれていることに気づき、喜びがこみ上げてきている心情。
- イ 茶道に熱心で厳しい稽古をする浅羽さんに教室に來ない理由を問われていることを察し、驚き慌てふためいている心情。
- ウ お稽古の際には容赦のない指導をする浅羽さんが自分の不在を心配してくれていたことを知り、感激に浸っている心情。
- エ 茶道教室ではきつい言い方ばかりする浅羽さんが自分の欠席を気にしていたことを悟り、申し訳なさを感じている心情。

③ 「**④**私を通っていたバレエ教室にも、厳しい先生がいらつしやいました」**⑤**とありますが、このように言った「星那」の意図として最も適当なのは、**ア**、**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 自分の経験を根拠にして、厳しい指導こそいずれば感謝されるようになるはずだと伝えるため。
- イ 自分の経験を引き合いに出して、厳しさは中途半端な優しさよりも値打ちがあると伝えるため。
- ウ 自分の経験を例に挙げて、厳しい先生は他にもいるのだから気にしないでよいと伝えるため。
- エ 自分の経験を踏まえて、厳しくされた記憶はいつまでも経っても消えないものだと思えるため。

④ 「**⑥**口角をゆるめ」**⑦**のここでの意味として最も適当なのは、**ア**、**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 満面の笑みを浮かべて
- イ 穏やかな表情になって
- ウ 気の抜けた顔つきになって
- エ 微苦笑に顔をゆがませて

⑤ 「**④**星那は、以前抱いた疑問の答えを、やっと理解した」**⑤**とありますが、それはどういうことを説明した次の文の**⑥**に入れるのに適当なことばを二十五字以内で書きなさい。

浅羽さんのお点前に心引かれるのは、浅羽さん自身が**⑥**があることの尊さを実感し、お茶室でのひとときを本当に大切にしているからだとうやく分かったということ。

⑥ 「**⑦**お願いします」とありますが、このときの「星那」の心情を説明した次の文の**⑥**に入れるのに適当なことばを二十字以内で書きなさい。自分と似た経験を持つ浅羽さんと話をしたことで、**⑥**ことができ、自分もお稽古を頑張りたいと考えるようになった前向きな心情。

次の文章を読んで、①～③に答えなさい。ただし設問の都合上、一部省略した箇所がある。

人間社会に同化された自然も、時に荒ぶる姿を見せ、恐ろしい存在に変貌へんぼうします。鎌倉時代初期の数々の自然災害を書き留めた『方丈記』は、なすすべもなく命を落としていく大勢の人々の姿を書き留めています。人間はまことに非力です。

こうした災害のときの日本人の姿は、海外から見たときに特異に見えることがあります。『ニューヨークタイムズ』（二〇一一年三月一日）に掲載された記事を要約された日本語（鈴子陽一『東日本大震災を生き抜く―岩手県釜石発被災者の日記』つり人社）で引用しましょう。

アメリカ人は、人間は自然に対峙たいじするものとしてみるが、日本人は人間を自然の一部としてみている。地震も自然の一部だ。日本語の自然という言葉は最近のもので、たかだか100年ほど前に作られたにすぎない。というのは、伝統的に自然という概念を必要としなかったからだ。阪神大震災の後、自分の書いた記事に引いた芭蕉ばしやうの俳句だ。

（悲しいことだなあ）  
うきふしや

たけのことなる

ひとのはて

A 日本人の忍耐力と粘り強さにはなんとか高尚で勇気づけるものがある。今後、それを目の当たりにすることになる。これは、共同意識の織り込まれた日本の社会が輝く時でもある。私には、アメリカ政治が見せている対極化や対立とは対照的に、日本人は協力しあつてこの危機を乗り越えていくだろうと思える。我々は日本からは学ぶものがある。だから、日本にはこの災害に対する深い同情の気持ちだけでなく、心から賞賛の念も抱くのである。

④ここで引用された芭蕉の句は、嵯峨野さかがのの小督ここしやうの墓を見たときの感慨です。小督は高倉天皇から愛された女性でしたが、死後は嵯峨野の土と化し、芭蕉が訪れたときにはその辺りから竹の子が生えていたというのです。人間は自然の一部であり、どんな人も消えて土に返ってゆきますが、そこから竹の子が力強く生えてくるように、自然はその生命を保ち続けるのです。

芭蕉は、平泉ひらいずみを訪れて、次の句を詠んでいます。

夏草や 兵どもが夢の跡つはらのあと  
〔奥の細道〕

奥州平泉の栄華、源義経げんぎよつねら武士の闘いといった人間の歴史は夢と化し、今は一面夏草が生い茂っているというのです。人間は変化するが、自然は変わら

ない。「仕方がない」という日本語や、諦念、無常観という概念は、敗北とはまた違います。大きな自然の中に身をゆだねている感じと言いますか、生まれることも死ぬことも大きな自然の中の小さな出来事にすぎないという感覚です。

(出典 谷知子『古典のすすめ』)

① 「<sup>①</sup>ここで引用された芭蕉の句」とありますが、この俳句の直前には次のような一節があります。この古文と俳句(うきふしや…)について、(1)～(3)に答えなさい。

(小督の)墓は三軒屋の隣、藪の内にあり。しるしに桜を(ⅰ)植ゑたり。畏くも錦繡綾羅の上に起き臥して、(ⅱ)終に、藪中の(ⅲ)塵あくたとなれり。

(注) 錦繡——錦の刺繍。

綾羅——綾絹と薄絹。

(『嵯峨日記』)

(1) 「(ⅰ)植ゑたり」・「(ⅱ)終に」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

(2) 「(ⅲ)塵あくたとなれり」の主語として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 藪 イ 墓 ウ 小督 エ 高倉天皇

(3) この俳句を解釈した次の文の X・Y に入れるのに適当なことを書きなさい。ただし、X は季節を答え、Y は本文中から十字で抜き出して書きなさい。

人の生は悲しいことだなあ。今や嵯峨野の土と化し、折しも季節は初 X で、その場から Y いるよ。

② 「敗北とはまた違います」とありますが、「敗北」という概念は、自然に対して人間をどのようにみる考え方に基づいたものですか。それを説明した次の文の  に入れるのに適当なことを、引用文から十字以内で抜き出して書きなさい。

人間を  としてみる考え方。

③ 「A 日本人の忍耐力と粘り強さにはなんとかが高尚で勇気づけるものがある」とありますが、芭蕉の俳句を挙げてそのように言う理由として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 日本人には、人間の生死を超えた自然の生命力への信頼感があるから。

イ 日本人には、人間の悲しみに寄り添い共に力を合わせる団結力があるから。

ウ 日本人には、人間の危機を巧みに乗り越える現実適応力があるから。

エ 日本人には、人間の存在を無視した自然の大きさへの親近感があるから。

手づくりといえば個性的な一品生産、機械づくりといえば規格化された大量生産というのが、<sup>③</sup>ジュウライの通念だろう。だが少し考えるとこれは大きな誤りであって、じつは伝統的な手づくりは本来、懸命に規格化と大量生産をめざしていたのである。輻輳<sup>ぶくごう</sup>づくりの陶磁器といい<sup>④</sup>機織りによる布地といい、さらに型抜きの細工物から木版画まで、Aのない職人仕事は一つとしてなかった。

ちなみに面白いのは、ウイリアム・モリスが手づくりの復興を<sup>⑤</sup>トナえるまえ、おりから盛んになった機械づくりへの非難は、それが規格化されていたかではなかった。機械づくりの絨毯<sup>じゅうたん</sup>があまりにも精緻<sup>せいち</sup>にしあげられ、模様は遠近法までとり容れられているのが不自然だ、というのが反対の主旨であった。もう一つ機械が批判されたのはその出来映えのせいではなく、機械が労働を分断して非人間化するという理由からであった。機械が労働のB化を進め、単純労働の反復を招いて仕事の達成感を奪うというのが、モリスの師匠格のジョン・ラスキンの主張であった。

<sup>⑥</sup>こうした機械批判は当然、二十世紀にいたってことごとく根拠を失ってしまった。手仕事では及ばない機械の精緻さはますます進化した。いまでは半導体のような精密商品は機械でしかつくれない製品になった。電子制御技術が発展するにつれて、逆に機械で一品生産をおこなうこともはや夢ではない。分業のもたらす労働の非人間化についても、機械が労働時間を短縮することによって解決されてしまった。労働者は多くの余暇を与えられることになって、そのなかで人間的な時間をとり戻すことができるからである。その余暇の楽しみとして、スポーツやゲームと並んであらためて手仕事が魅力を増したのは、<sup>④</sup>皮肉だともいえる。

結果として、現代に残された手づくりの意味とは何であろうか。第一はほかならぬ余暇のなかの手仕事であって、手料理や庭いじりや模型づくりなど、現実的な効用を期待しない作業の楽しみだろう。現実の効用上上の仕事は目的の無限の連鎖のなかにあって、たとえば木を伐<sup>き</sup>るのは板を削るためであり、板を削るのは家具を組み立てるため、家具をつくるのはそれを売って利益を得るためと、際限がない。

人生の全体も教育は就職のため、就職は収入のために、収入は老後の安心のためにと、きりがない目的へと人を駆り立てる。この目的連鎖は人を疲れさせるばかりか、人生にもともと最終目的というものがなく、ときに徒勞感さえもたらしかねない。その点、<sup>⑥</sup>趣味の手仕事はものをつくれればその先はなく、人に成就の喜びと現在の充実を感じさせる。

だがそれ以上に大きな手仕事の意味は、じつは手の働きが知能や認識を刺激するという点にありそうである。かつてコンラート・フィードラーという<sup>⑤</sup>藝術家<sup>げいじしゆつ</sup>が言い出したことだが、絵描きは手で描くことよってよりよく対象が見えるという事実が知られている。人間は見たものを描くのではなく、描いたものをはじめて見るのだというのが彼の言葉だが、考えればこれは一般に思索や考察のすべてにあてはまるように思われる。

現にものを考えるのに思いつきを図に描いてみたり、複雑な設計をするのにまず一本の線を引いてみたりするというのは、誰もが黙ってやっている手順ではないだろうか。「イメージを描く」というのは広く知られた比喻であるが、人間は着想を抱くとき、文字通り頭のなかで「描いて」いるのではないだろうか。手と頭の関係、手と想像力の関係はこれからの研究課題だとしても、これが重要であることはほぼ確実だといえる。

示唆的なのは、手仕事が道具を介して素材の抵抗を人に伝え、対象の反作用を精神に与えるという事実だろう。頭が一方的に機械に命令を下す作業は、



効率という点ではめざましいものがあるが、けつして逆に精神を刺激する力を持たない。これにたいしてたとえば手を使って描く画家は、筆を介して意のままにならない紙を感じとり、それとの格闘のなかで彼自身の画想を修正し深化する。これの繰り返しのあげくに画家が描きあげた形が、フィードラーによれば、彼がほんとうに目で見えたものと呼べるのである。

同じことはいうまでもなく、自然科学の実験という営みにもあてはまるだろう。実験は科学者がものを見る方法であるが、これも漠然と対象に目を向けるのとはちがって、構想と手仕事の往復を内に含んでいる。ニュートンやその先輩のロバート・フックなどは、実験の名手であるばかりか、みずから巧みに実験道具を手づくりする職人でもあったという。おそらく彼らのアイデアは道具づくりの手仕事の抵抗を受け、できた道具からも再考を迫られ、心身一如の活動の過程でしだいに明らかになっていったものと想像できる。(中略)

それにしても、<sup>①</sup>手仕事が人間の究極の楽しみでもあり、同時に知識基盤社会の根源的な原動力だという事実は面白い。楽しみと仕事、非日常と日常が一つになるとすれば、人類の未来はバラ色だというべきなのだろうか。

(出典 山崎正和「大停滞の時代を超えて」  
文庫版 山崎正和の著作)

(注) ウイリアム・モリス——十九世紀イギリスの詩人、デザイナー。

心身一如——心の働きと体の働きが一体となった状態。

① ——の部分<sup>①</sup>、<sup>②</sup>を漢字に直して楷書<sup>かいしよ</sup>で書きなさい。

② 

A
---

、

B
---

にそれぞれ入ることばの組み合わせとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア A 規格 B 高度      イ A 個性 B 高度      ウ A 個性 B 分業      エ A 規格 B 分業

③ 「<sup>①</sup>こうした機械批判は当然、二十世紀にいたってことごとく根拠を失ってしまった」とありますが、筆者がこのように述べる理由を説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 機械が規格化された商品の大量生産をやめて一品生産をおこなうようになり、加えて機械は人々に余暇を楽しむ時間的な余裕を与えたから。  
イ 機械が手仕事をはるかに上回る精巧さを実現できるようになり、そのうえ機械は手仕事に代わって一品生産までもおこなえる見込みだから。  
ウ 機械が極めて精巧な商品を生み出せることは周知の事実となり、さらに機械は人々に人間らしい充実感のある余暇の時間をもたらしたから。  
エ 機械が精密商品をつくれるのは人間の労働の賜<sup>たまもの</sup>だと認知されるようになり、結果的に機械は人々に仕事の達成感を取り戻してくれたから。

- ④ 「**皮肉**だ」とありますが、どのようなことが「皮肉」なのかを説明したものとして最も適当なのは、**ア**、**イ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ア** 機械化の進行により労働時間は短縮できたのに、それでも手間のかかる手仕事という労働への愛着が消えないでいること。
- イ** 機械化の隆盛により手仕事は脇へと追いやられたはずなのに、かえって手仕事が脚光を浴びる事態になっていること。
- ウ** 機械化のおかげで手仕事をする必要はなくなったはずなのに、いまだに他の娯楽よりも手仕事に人気が集まっていること。
- エ** 機械化の影響で仕事の達成感が失われたと非難されてきたのに、一方手仕事は達成感がなくとも支持を得ていること。

- ⑤ 「趣味の手仕事はものをつくれればその先はなく、人に成就の喜びと現在の充実を感じさせる」とありますが、その理由を説明した次の文の□に入るのに適当なことを、文章中から八字で抜き出して書きなさい。

余暇に楽しみでする手仕事は、人々を先へ先へと駆り立て疲弊させる□から切り離された、それ自体で完結する営みだから。

- ⑥ 「<sup>①</sup>手仕事が人間の究極の楽しみでもあり、同時に知識基盤社会の根源的な原動力だ」について、先生と二人の生徒が話しています。□**X**、□**Y**に入れるのに適当なことを、□**X**は十字で文章中から抜き出し、□**Y**は三十文字以内で書きなさい。また、□**Z**に入れる具体例として最も適当なのは、**ア**、**イ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

先生 「知識基盤社会」とは一般に、「新しい知識・情報・技術が、あらゆる領域で活動の基盤となる社会」のことだと定義されています。筆者が述べ

ている、手仕事は知識基盤社会の原動力だ、というのはどういうことか分かりますか。

美空 その答えは、筆者が手仕事の最大の意義を、手を動かすことが□**X** ことに見ている点を踏まえて考えればよいのではないのでしょうか。私も

数学の図形問題を解くときに、補助線を書き入れていると解法を思いつくことがあるので、筆者の意見に納得できます。

亮太 さらに付け足して言うと、「抵抗」というのがキーワードだと思えます。筆者が例として挙げている画家も科学者も、□**Y** ことで、精神が

刺激され、ついには真に物事を捉えることができる、ということが述べられています。だから手仕事は、知識基盤社会に必要な、新たな知の発見や創造を促すものだ、と、筆者は言いたいのですね。

先生 二人ともしっかり考えられましたね。筆者が述べているように、こうした手仕事は、私たちの誰もがやっていることです。たとえば、□**Z**は、筆者の主張に当てはまる具体例と言えるでしょう。

- ア** 庖丁を使ってやわらかい食材や固い食材を切っているうちに、力加減を体得してスムーズに調理できるようになること
- イ** 竹ひごを組んで飛行機の模型を何度も作り直しているうちに、思いがけず新型の飛行機のアイディアが湧いてくること
- ウ** 様々な楽器に触れて少しずつ演奏を試してみるうちに、曲のイメージが形づくられて創作活動へとつながっていくこと
- エ** ラケットにボールを当てて打ち返す動きを続けるうちに、他のことを考えながらも体が自在に動かせるようになること

4

夏樹さんは、授業で【資料Ⅰ】について学習し、さらに言葉の誤用に関する【資料Ⅱ】・【資料Ⅲ】も用いてレポートにまとめることにしました。これを読んで、①～③に答えなさい。

【資料Ⅰ】

伝統性（本来はこうである）が、言葉の「正しさ」の条件の筆頭であることは間違いありません。新聞で用いる言葉に関しても、第一義的には伝統性を尊重して正誤を判断しています。

しかし「正誤」の尺度を伝統性に限定してしまうと、言葉の「変化」は全て「乱れ」と断じるしかなくなります。伝統性の観点からみれば「乱れ」でも、多くの人に支持され、幅広く使われれば、「正しさ」を獲得していきます。言葉の正誤の判断を伝統性のみ委ねるのは、読者の言語使用の実態からかけ離れていくおそれが多分にあります。広く受け入れられているか、広範性を持つかどうかを無視するわけにはいきません。（中略）

伝統性と広範性が相反する場合にどちらを採るか、新聞社にとっては頭の痛い問題です。いずれを選んだとしても、それを支持しない読者に対し、納得のいく説明ができなければなりません。正誤を判断するには伝統性と広範性に加え、合理性（理にかなっている）という視点が必要になってきます。伝統にはかなっていないなくても、その意味や用法が現代あるいは将来の日本語を使ったコミュニケーションにとって有益であるならば、認められるべきでしょう。一方、いかに広範に用いられていても、それが誤解を生みやすく、意思の疎通の障害になる可能性があれば、意識して伝統的な言葉遣いに戻していく努力が求められます。

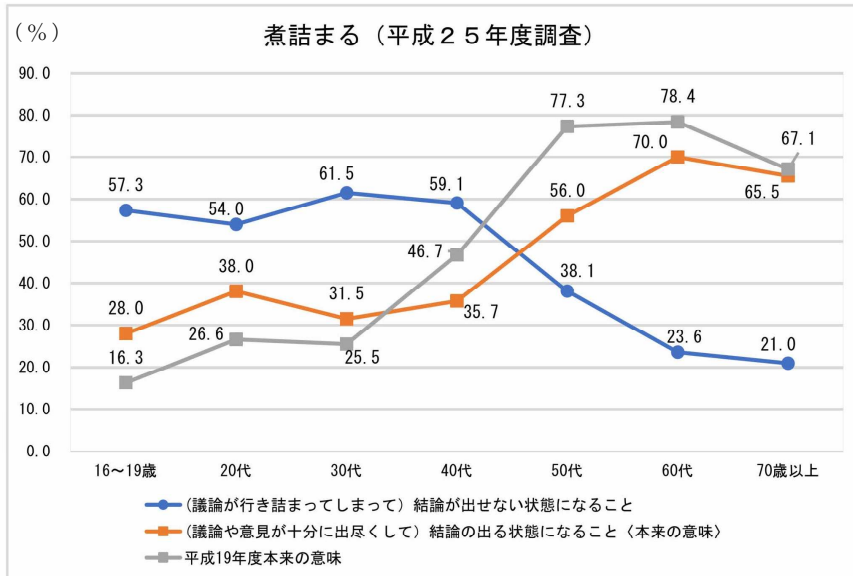
（関根健一「言葉の正誤と変化——新聞の立場から」文化庁月報 平成二十五年一月号）

① 【資料Ⅰ】で示された、言葉の正誤を判断する観点を、それぞれ漢字三字で三つ答えなさい。

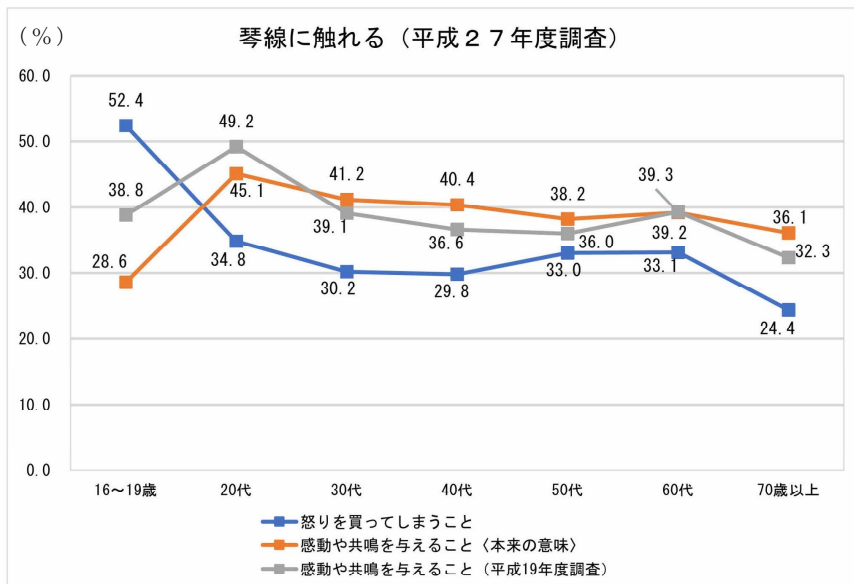
【資料Ⅱ】

② 【資料Ⅱ】について説明したものと**当てはまらないものは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。**

- ア 「煮詰まる」についてのグラフによると、10代～40代の五割以上が、本来の意味とは異なるものを選んでいる。
- イ 「煮詰まる」についてのグラフによると、40代以上で、平成19年度と比べて本来の意味を選んでいる人の割合が減っている。
- ウ 「琴線に触れる」についてのグラフによると、すべての年代で、本来の意味を選んでいる人の割合が高くなっている。
- エ 「琴線に触れる」についてのグラフによると、10代で、平成19年度と比べて本来の意味を選んでいる割合が約10ポイント減っている。



(文化庁 平成25年度「国語に関する世論調査」より作成)



(文化庁 平成27年度「国語に関する世論調査」より作成)

③ 夏樹さんは、【資料Ⅰ】と【資料Ⅲ】を用いて、言葉の意味が変化していることを許容するかどうかについて、自分の意見をまとめることにしました。その意見を、「煮詰まる」、または「琴線に触れる」のどちらかの事例を用いて、条件に従って八十字以上、百字以内で書きなさい。

条件

- 1 解答欄の【「煮詰まる」・「琴線に触れる」】のどちらか一つに○を付けること。  
また一文目に、解答欄の書き出しに続けて「許容する」・「許容しない」のどちらかを選んで書くこと。
- 2 二文目以降に、そのように判断する理由を書くこと。

【資料Ⅲ】

「役不足」は、「役目が軽すぎる」という伝統的な理解よりも、「役目が重すぎる」という理解が広範性を持ちつつあります。全く正反対の意味が通用しているわけで、相手がどちらで理解しているかを知らなければ、コミュニケーションが成り立ちません。

この言葉の意味が変化してきたのは、「役不足」が「力量に比べ役目が不足している」と「役目に比べ力量が不足している」との両様に読めることが原因のひとつでしょう。日本では役割やポストに関しては謙遜して述べるものだとする文化的な背景から、「力量が不足」の方が使用機会が多いということもあるかもしれません。しかし、その意味であれば「力不足」という言葉がすでに存在しています。「役不足」に本来の意味とは正反対の意味をあえて認める理由はなさそうです。広範性はあっても、変化を許容する合理性は薄く、伝統性を守るべき言葉ではないでしょうか。

（関根健一「言葉の正誤と変化——新聞の立場から」文化庁月報 平成二十五年一月号）